学習者の個人差と第二言語習得
−「学習スタイル」を中心に−

真嶋　潤子(大阪外国語大学)

要旨

本稿は, 第二言語習得の成功に影響を与える学習者の個人差に関する研究のうち, 学習スタイルに関する研究を概観し, 考察を加える。この領域は日本語教育においては盛んであるとは言えず, また学習者要因に何が含まれるかについては, 研究者間で合意が形成されていない。本稿ではその中で「学習スタイル」とりわけ「場独立・場依存認知スタイル」に絞って研究動向を概観した。「学習スタイル」研究が難しい点は, 概念構成と実証研究のための測定方法に妥当性を持たせることであると指摘できる。これまで「場独立・場依存」という概念の妥当性に批判が多かったが, 「場に敏感」かどうかという視点を加えた教育への応用(Leaver 他　2005)や, 「学習ストラテジー」との関連性を持たせた研究の方向性を紹介し, 今後の可能性を示唆した。

キーワード：個人差, 学習スタイル, 場独立・場依存, 学習ストラテジー,

1.　はじめに

日本語教育の現場で一般に経験されることであるが, 同じ教師が同じ教材を使って同じ母語の学習者に教えていても, 学習者の到達度に異なりが出る。その原因について疑問に思わない教師はいないだろうが, 「できる学生」と「そうでない学生」というラベルを貼ることで簡単に割り切ってしまったり, 「本人の努力」の有無と片付けてしまったりしていないだろうか。日本語教育の第二言語習得研究の分野で, この学習者の個人差, または学習者要因と呼ばれる研究が少ないのは, 個人差の要因の概念構成が難しく, またそれを測る方法を妥当性を持たせて確立することが困難だからだと考えられる。

本稿では, 欧米の研究を中心に, 学習者の「個人差」を理解し, それが第二言語習得に及ぼす影響, ならびにそれを指導に生かしてより効率的な言語学習を支援するためになされてきた研究を概観し, 今後の第二言語習得研究の分野における「個人差」の研究の可能性と, その言語教育への示唆について考察する。「個人差」がかかわる範囲は非常に広範にわたるので, 本稿では特に学習スタイル, とりわけ認知スタイルに焦点

をあてることとしたい。

まず, 個人差の要因の研究動向を概観する。その後, 学習スタイル, 特に認知スタイルとして注目されていた「場独立・場依存型スタイル」という要因の研究動向を取り上げたい。

2. 個人差の研究

「個人差」は大きく「認知変数」「情意変数」「性格変数」に分けて論じられることが多い(Johnson & Johnson 1998; 220)が, それぞれの下位概念の扱いは様々で, どのような要因を含めるかについて研究者の一致した見解はない。個人差というものが最初に書名にすえて論じられたのは Skehan(1989)であるが, Ellis(1991)にも詳しく論じられている。最も網羅的に論じているのは, H.D.Brown(2000)であろう。Brown はまず, 1) スタイルとストラテジー, 2) 性格的要因の二つに大きく分け, それぞれの下位項目として第二言語習得に関連のある事項を以下のように挙げている。

表１　学習者の個人差に関わる要因　Brown (2000) より作成

スタイルと ストラテジー	学習スタイル 学習ストラテジー	場依存・場独立 FD/I 左右脳機能 曖昧さへの寛容 熟考・衝動 視覚・聴覚型 メタ認知ストラテジー 認知ストラテジー 社会情意的ストラテジー コミュニケーションストラテジー
性格的要因	情意領域 性格テスト(Myers-Briggs Type Indicator で測る性格) 動機 情意の神経生理学 情意要因の測定	自尊心(self-esteem) 防衛本能(inhibition) 危険を冒すこと(risk-taking) 不安(anxiety) 共感(感情移入)(empathy) 外向性(extroversion) 感覚／直感(sensing versus intuition) 考えること／感じること(thinking versus feeling) 判断／知覚(judging versus perceiving) 道具的志向と統合的志向 内的・外的動機

Brown の分類(表１)は広く関連する項目を集めて解説しようとしたところがあり, この分野の定番というわけではない。学習者の個人差についての研究は Brown 以外に,

Lightbown & Spada (1999), Breen 編(2001), Kaplan 編(2002), Macaro(2003)などがある。

Lightbown & Spada (1999)では, 1)知性(Intelligence), 2)態度(Attitudes), 3) 性格(Personality), 4)動機と態度(Motivation and attitudes), 5)学習者の好み(Learner preferences)：学習スタイル(視覚型／聴覚型／運動感覚型, 場独立／場依存型), 6)学習者のビリーフ(Learner beliefs), 7)習得の年齢(Age of acquisition) の 7 項目を挙げている。その後の Breen 編(2001)では, 「学習者の貢献」という切り口から言語学習を見直し, 学習者個人, コンテクスト上での学習者の活動, 教室というコンテクスト, さらに広いコミュニティでのアイデンティティと参加という広がりの中に, 学習者の個人差が位置づけられている(同書, p.180 の図参照)。

Kaplan 編(2002)における個人差の扱いは, 比較的目立たない形になっているが, その中で, Oxford(in Kaplan 2002)による「言語学習の変異に関連する学習者個人の性格」という節では, 大きく 3 点に絞って論じている。1)「スタイル要因(Stylistic Factors)」, 2)「認知要因と情意要因」, 3)「人口統計的要因(Demographic Factors)」つまり性別と年齢である。さらに Macaro(2003)は, 言語学習に影響する 2 大要因として「認知」と,「態度と動機」に関する研究に二分している。後者は, 外国語学習に対する態度と動機の英国での研究史を概観し, 動機に関するこれまでの定義(三つの流れ), 動機に影響を与える要因, 学習者の個人差, 下がった動機を上げるためのストラテジー研究, テクノロジーの利用, 教師の見方を論じるといった構成になっている。

しかし, 最もうまく先行研究をまとめていると評価できるのは Dörnyei & Skehan (2003)で, 第二言語習得研究の分野でこれまで重要な議論の展開を見せてきたテーマである 1)適性(Aptitude), 2)認知スタイルと学習スタイル(Cognitive and Learning Style), 3)言語学習ストラテジー(Language Learning Strategies), 4)動機(Motivation)という 4 項目に絞っている。

3. 学習スタイル研究の発展

本節では, まず「学習スタイル」研究の発展を概観し, 次にそれらと関連の深い学習ストラテジーを取り上げる。「学習スタイル」と「認知スタイル」は, 明確に区別されないことが多い[1]。Dörnyei & Skehan(2003)では, 「学習スタイル」は, 学習のあらゆる側面において典型的に好んで使われるアプローチの仕方で, 「認知スタイル」は, 情報を処理する時に限って好んで用いられる方法だと区別して定義しているが, 本稿でもこれに従う。

「学習スタイル」を広義で考えると, 人が情報を処理する際や社会的相互作用を行う際, 場面や課題によって無意識に好んで使うやり方で, 長期的に見ても変化しにくいものである。そうすると, そこには認知要因のみならず, 動機に関する側面, 情意に関

する側面も含まれてくる。「学習スタイル」の構成概念は, 直接的な観察ができず, 帰納的に類推する必要があり, また学習者個人が自分の学習スタイルを意識または理解しているとは限らないものであるところに, 捉えにくさがある。

学習スタイルは, 「視覚型対聴覚型」「外向性対内向性」という例のように, 連続帯で両極端をもつものとして示されるが, その両端は, 絶対的な優劣や善し悪しの価値判断を含むものではないとされる(Brown, 2000; Larsen-Freeman and Long, 1991; Witkin & Goodenough, 1981; Naiman et al, 1978)。それに対して, 例えば外国語発話能力のような能力は, 一方が良く望ましいとする連続帯となる。また能力差は到達レベル差として表せるが, 学習スタイルは情報処理の様式, やり方の違いであり(能力)レベルといった捉え方ではないとされている。しかし, 「場独立・場依存型」を測定するようなレベルを見る場合など, それは研究者の観点にそって再構成された理念形の違いであって, 後述するが, 使用される道具で測っているのはレベルの差ではないかという指摘もある(Grotjahn 2003)。

「学習スタイル」と「認知スタイル」の理論的また実証的な研究は, 主に英語教育の分野で, 数多く行われてきた(Brown 1994; Reid 1995; Ehrman 1996; Skehan 1998)。そこで研究課題となっているのは, 大きく分けて二点である。ひとつは, 「学習者の個人差要因が, 言語学習の成功を予測することができるか」という問題で, もうひとつは「学習者による言語学習の成功不成功の原因を個人差に求めようとする」ことであった。早い時期の「優れた言語学習者」研究で傑出しているのは, Naiman et al.(1978)であるが, それ以降, 優れた言語学習者の特質を明らかにすることによって, より良い指導が模索されるようになってきた。

「学習スタイル」の分類は, 研究者による合意には至っておらず, Oxford & Anderson(1995)は 20 以上の分類を挙げるが, Grotjahn(2003)は大きく５つに分けて論じている。1)分析的／包括的スタイル, 2)熟考型／衝動型, 3)あいまいさへの寛容／不寛容, 4)特別な好みの傾向：視覚型／聴覚型, 運動型／静止型, (接触型), 5)文化的差異のある個人差である。5)は, Scarcella & Oxford(1992)でも指摘されるように重要な点である。具体的には Ramirez, Herold & Castaneda (1974)や Hansen(1984)が, 文化差を示唆する調査結果を出しており, Eliason, P.A. (in Reid 1995, Ch.2)が文化を超えた認知スタイル測定の難しさを論じている。

これらを通して指摘できるのは, 「学習スタイル」の意味するものが研究者によって異なっており, どの調査も学習スタイルのうちの少数の特徴を測っているに過ぎないということである。Grasha(1984; 47)が言うように, 人間の学習理論よりも研究者個人の経験に根ざした研究が多く, 学習スタイルを測る道具には, 妥当性に疑問が残ると言わざるを得ない。

日本語教育における個人差を扱った文献は, 絶対数が少ない上に, 個人差の特徴を把

握し定義しようとする段階にとどまっているものがほとんどである(板井　2002；伊東　1994；江原　1998；サミミー小宮　2003；谷口　1990)。これは個人差の要因の概念構成の規定や定義が難しく, またその測定も容易ではないことが一因ではないかと思われる。これまでの欧米での研究の多くは, 「個人差」のいずれかの要因に焦点を当てて, それと学習者の言語能力または到達度との相関関係を調べるといった量的研究の手法をとるものが多かった。その中から, 次節では一時は脚光を浴びていた「場依存・場独立認知スタイル」の研究に目を転じたい。

4.　「場依存・場独立認知スタイル(Field Dependence/Independence Cognitive Style)」再考

4.1　概念構成上の問題

「学習スタイル」の中でかつては最も重要とされ, 独自の発展史を歩んできた「場依存・場独立認知スタイル」を見ておきたい。「場依存・場独立」認知スタイルは, 心理学の領域から第二言語習得の分野に援用された概念で, もともとは空間把握の個人差を捉えるものであり, 言語学習とは異なる分野で使用されていた概念である(Witkin et al. 1971, 1977; Witkin & Goodenough 1981; Chapelle and Green 1992 他)。

「場独立(FI: Field Independence)」スタイルは, 情報をその構成要素に分解して分析し, 重要な物とそうでないものをよりわけて理解しようとする認知スタイルで, 「場依存(FD: Field Dependence)」というのは, それとは異なり情報(情報構造)を全体として「ゲシュタルト的に」とらえようとする認知スタイルである。「場独立」の人は, 人から離れて一人で問題解決に取り組むことを好み, 「場依存」の人は逆に社交的でグループ作業を好むとされる。

これらのスタイルはいずれも言語学習に有利な側面を持っている。「場独立」の学習者は言語項目の分析を好み, 系統的に整理して学ぶことを好む傾向があるのに対して, 「場依存」の学習者はコミュニケーションのための言語使用を好み, 「話して身につける」タイプであると言われている(Stansfield & Hansen 1981, 1983 他)。

「場依存・場独立スタイル」は, 学習者の第二言語能力と関係があるとして実証研究がなされた(Stansfield & Hansen 前掲書; Roberts 1984;　Hansen 1984; d'Anglejan & Renaud　1985 他)。しかし, グループ埋没図形テスト(Group Embedded Figures Test : GEFT)と言語能力を測るテストとの相関をみるような調査では, いつも一貫した結果が得られたわけではなく, 相関のみられない調査もあり, 一般的な強い関係は支持されていない。

このように一貫した結果の得られない実証研究に対して, Chapelle & Green(1992)はFD/I を測定するテストは, 実は一つの側面(Cognitive restructuring)しか測っていないの

ではないかと, テストの妥当性について疑問を呈した。つまり, FD/I の定義と, 測り方の整合性に問題があるということである。

確かに第二言語教育の分野でこの「場独立・場依存」認知スタイルを利用した研究は多いが(Chapelle and Green,1992; Ehrman, 1996; Griffiths and Sheen, 1992; Skehan, 1989, 1998 参照), これまでに出された研究結果をまとめると次のようになる。

1.「場独立・場依存」認知スタイルと言語学習到達度との相関関係は概して低い
2. いずれのスタイルも強みがあるという主張にも関わらず, 言語能力と正の相関を示すのは, いつも「場独立スタイル」である
3. 統計的有意を示さない調査結果もある
4. 知能(intelligence)を測る側面をはずすと相関関係が低く出ることから, 「場独立・場依存」認知スタイルは知能の別名ではないかという疑いがもたれている(Dörnyei & Skehan 2003)

90 年代の進展を振り返ると, FD/I は言語学習の個人差として言語学習の成否を予測する変数としては問題視され, 論争が展開された(Griffiths & Sheen 1992; Chapelle 1992; Sheen 1993)。そもそも直接的に言語学習に関連する指標としては, FD/I の成立起源からして問題があったことは否めない。「場依存度」と「言語能力／到達度」(または他の学科の成績など)との相関を見るというデザインの研究は, 相関関係があると報告されている場合でも, それが言語学習の成功の予測指標以上のものにはなりにくい。そもそも FD/I という変数(あるいは要因)は, 言語教育にとって重要ではなかったのではないか, 関係が薄いのではないかとまで言われるようになった(Griffiths & Sheen 1992; Sheen 1993)。

Skehan (1998)は, 「場独立・場依存」が分析的処理と包括的処理という二極をなすという元々の二者択一的な考え方そのものに疑問を呈している。むしろ, この差は言語学習にあてはめると, 分析的性向と記憶の問題で, かつ能力とスタイル両方の問題ではないかと指摘している。つまり, 分析的かつ記憶力が良い学習者がいる一方, そのどちらも弱い学習者も, またどちらか一方が強い学習者もいる。分析力と記憶力がある学習者でも, 必ずしもそれを優先的に使うとは限らず, 好みに応じて分析的でない包括的処理と記憶力を使うこともあるだろう。この考え方は, 後述する学習ストラテジーに関連する重要な指摘ではないかと考える。

Majima(1994), 真嶋(1998)では, GEFT で測定したFD/I の度合いと, 日本語学習者の到達度の相関を見る量的研究部分と, 極端なFD/I 度と到達度を示した学習者への質的調査から, 認知スタイルと学習者に与えられた課題と学習ストラテジーの関連について考察している。認知スタイルと到達度の相関は統計的有意を示さなかったが, 与えられた課題を全うするために, 各自のもつ学習スタイルの不得手な面を乗り越える学習ストラテジーを駆使できた学習者は成績上位にくるというメカニズムを示唆して

いる。

4.2　測定方法上の問題

「場独立・場依存」スタイルの問題点は, 概念構成のみならず測定方法にもある。GEFT は使いやすい道具だが, 特に視覚情報に偏っており Cronbach(1970)は妥当性に問題があると指摘している。Griffiths & Sheen (1992)でも, 視覚的分析力と言語能力の相関という概念構成そのものが批判されている上に, その測定手段(グループ埋没図形テスト Group Embedded Figures Test を利用する調査が多い)の妥当性に問題があるのではないかという指摘がなされている。

Griffiths & Sheen (1992)は, 「場独立」という概念が本家の心理学でも古くなったとされていること, 言語領域にうまくあてはまらないこと, 知能の別名ではないかということ, これまで重要な研究成果が上がっていないことをあげて, 強く批判している。Larsen-Freeman(2001; 22)でも, Elliott(1995)で GEFT がスペイン語の発音習得の成功を予測する力がなかったことを挙げて, 「場独立・場依存スタイル」の妥当性を批判している。

Chapelle & Green (1992)や Chapelle (1992)による援護的反論は, 三つの論点に集約される。すなわち, １)人が判断の参考にするものが, 外的な物か内的な物であるかの差, ２)認知構造の再構築の仕方の差, ３)対人関係の能力のそれぞれに関して, 個人差があり二極に分かれるというものである。２)は確かに知能(intelligence)に関連すると見られるが, １)と３)はそれとは異なっているように見受けられ, 問題解決方法の認知スタイルによる違いから, 新たな研究の可能性が示唆されている(Dörnyei & Skehan 前掲書)。

4.3　新しい動向

「場独立・場依存」スタイルの新しい展開として, Riding(1991)が Witkin の GEFT から開発したコンピュータ利用の手段では, 分析的／包括的スタイルと, 言語的／画像的側面を区別できるようになっており, どちらか一方のスタイルでなく, 両方のスタイルで高得点となることも可能になっている。今後の発展の可能性もあり, この認知スタイルの概念と測定方法が改善されれば, 興味深い研究の可能性も期待される。

「場独立・場依存」スタイルは「認知スタイル」であると言ってきたが, Reid(1995)では認知領域に限らず「感覚志向 sensory preference」や「性格 personality」をも含むことが提案されている。そこでは聴覚, 視覚, 身体的, 触覚の好みも含まれている。Oxford & Anderson(1995)ではさらにそれを広げて, 第二言語学習に関連する 20 以上の項目を挙げている。

認知スタイルをこのように広げて学習スタイルと近づけると, Kolb (1984)のいう個々の学習者から, 自律的学習者のテーマへと議論が発展する可能性がある。Kolb によると, 学習者は「具体的経験」から「観察熟考」「抽象化」「経験の実験化」という

順に昇華させ「理想的な学習サイクル」を作る。言語学習では,「具体的経験」段階から「観察熟考」に至る時には例えば文法規則の「気づき(noticing)」が起こり, それが「抽象化」段階で概念化され, それを使ってみようとする「経験の実験化」の段階に至るという筋道が仮定できる。Kolb のモデルは言語教育を念頭に置いた物ではないが, 第二言語習得研究で近年重要な Focus on Form と重なり合うところがある。また Kolb(1976, 1984)の開発した Learning Styles Inventory は, 学習スタイルの測定手段として, 今後の研究の道具となるかもしれない。

「学習スタイル」という用語はかなり広い心理学のレベルと行動のレベルの文献で使用されているが, 厳密な定義が定まっていないという理論上の問題点があるという点でも「学習ストラテジー」と共通する弱点を持っている。Schmeck (1988)が指摘するように, 学習スタイルと学習ストラテジーは密接な関係があり, 学習スタイルは学習ストラテジーを習慣的に多くの場面で使うことによって形成されるとしている。そうであるならば, 学習スタイルが独立した個人差の要因であるのか, 様々な能力や技能, 性格, それまでの学習経験などの要因に基づく情報処理と学習行動のある種の型を便宜上そう呼んでいるだけなのかの疑問もわく。しかし学習スタイルが, 第二言語習得と教育的にどのような関係にあるのかを示すことができれば, 研究発展の可能性と意義があると思われる。

前述したように, 過去約 30 年を振り返っても, 学習者要因(この場合「場独立・場依存」スタイル)と言語習得の成功との結びつきを探る多くの研究結果は, 一定の結論に集約されず相反する結果を導いていたり, 解釈不能であったりして, 単純に二変数が相関関係を示すことはないようである。

学習者の個人差(認知スタイルを含む)と学習ストラテジーは, 一対一で対応しているものではなく, もっと複雑なものである。近年は, 学習者の個人差の変数と学習上の成功との直接的な関係を求めるのでなく, 他の要因として例えば学習環境や授業の要因との関連を探るような方向に向いてきている。Robinson(2002)は, 学習者の個人差の研究に, どのような教室活動での課題要求をしているのかという観点を取り込むべきであると指摘し, 指導上の要因を見定めた上で学習者の個人差を研究する重要性を説いている。このような取り組みは, 教育現場にも有益な示唆を与えるものと評価できる。今後は, 個人差の一変数と日本語能力の相関を見るという単純な研究デザインでなく, タスクの種類などの変数との総合的な関わりを見るような研究が望まれる。

「学習スタイル」の応用については, Witkin らの認知スタイルを統合発展させた「認知スタイルラベル(Cognitive Style Labels)」(Riding et al. 1998)を使って, 教育の分野で e ラーニング用の教材開発をする試みが報告されており(多喜 2005), 認知スタイルの再考から新たな発展が模索されているように見受けられる。

ここで, 学習スタイルと学習ストラテジーの教育的な研究からの成果を, 第二言語習

得に成功するためにはどうすれば良いかという観点から Leaver, Ehrman & Shekhtman(2005)が論じた先駆け的な提案を紹介しておく。これまで第二言語習得研究の枠組みにおいて, 上記のような概念上の問題と調査研究上の問題があった「学習スタイル」であるが, 10 のスタイルをひとつにまとめて開発者の頭文字を取って「E & L モデル」とし, 学習に役立てようとした試みは興味深い。

Leaver et al.(前掲書)では, 10 項目の「認知スタイル」のそれぞれの「物差し scale」を提示して, 学習者に自分のスタイルを考えさせる。その組み合わせによって個々の学習者の「学習者プロフィール」ができるが, それを認識した上で, 実際の言語学習場面において「教科書や先生や教え方が自分に合っていないミスマッチという場合には, それをいち早く把握して必要な逆の学習スタイルが使えるようにストラテジーを発展させることができる(pp.81-82)」とされている。そのように「学習スタイルの把握による学習者プロフィール」を理解した上で, 「学習ストラテジー」を解説するという流れになっている。つまり, ここで明らかなように「学習スタイル」は学習者がより良い学習者となるために現状を把握する目的で提示され, 問題があれば「学習ストラテジー」を活用し, それによって言語学習状況で学習者が直面する課題を, 学習者が主体的に解決することができるように指導するのである。

Leaver らが提示している「学習スタイル」は, 「感覚的な志向」(「視覚的学習」「聴覚的学習」「動作的学習」の３項目)とは別に「認知スタイル」として以下のような 10 項目にまとめられている。

表 2「認知スタイル」E&L 構成概念一覧(Leaver, Ehrman & Shekhtman 2005;71 より)

認知スタイル	スタイル	定義	逆スタイル	定義	元になった研究
1 アナログ／デジタル型	デジタル	文字と事実からの学習	アナログ	メタファーによる学習	Ehrman & Leaver
2 具体的／抽象的	抽象	考えと本を通して学ぶ	具象	経験から学ぶ	Gregorc
3 場独立／場依存	場独立	脱文脈化した学習	場依存	文脈で学ぶ	Witkin & Goodenough
4 場に敏感／敏感でない	場に敏感でない	学習に浸りきらない	場に敏感	浸りきることで学ぶ	Ehrman; Ramírez & Casteñada
5 グローバル／個別	グローバル	大きく見る指向性	個別	細部を見る指向性	Ehrman & Leaver
6 衝動／黙考	衝動	思考と反応が同時	熟考	反応は思考の後	Messik
7 帰納／演繹	帰納	例を通して規則を理解	演繹	規則を学んでから例を理解	Pierce
8 平準／鋭利	平準	共通点への気づき	鋭利	相違点への気づき	Holzman & Gardner, Messick
9 無作為／順序	無作為	自分で材料を整理することを好む	順序志向	前もって整理された材料を好む	Gregorc
10 統合／分析	統合	部分を全体に組み立てる	分析	全体を部分に分解する	Kant

この 10 項目の中で特に注目したいのは, 「3 場独立・場依存」スタイルの扱いと, それに改良を加えた「4 場に敏感・敏感でない」スタイルの扱いである。Leaver らは, まず「場独立・場依存」について説明した後, 「場に敏感・敏感でない」学習者について建設的な扱いをしている。(pp.72-74,訳は筆者)

(3)「場独立・場依存」: . . . (中略). . . 外国語学習における「場独立」は, 重要なことや焦点を当てるべき事柄を選び出すことができるという意味である。「場依存」は, 「場独立」性が欠落していることである。例えば, 複数形の学習をしている時に, 「場独立」スタイルの学習者なら, 即座にどこに複数形があるのかがわかって, また無意識のうちに扱いやすいように複数形の形の異なる物を整理しているかもしれない。「場依存」の学習者なら, 教科書や先生やシラバスにたよって整理することになるだろうが, それらは使われるためにある。「場依存」というのは, 隠し絵を道具として測られる能力だと考えられることも多いが, ここでは処理する際の好みのやり方と捉えておく。しかし, 好みは頻繁に使われることで能力になることも多いことを付け加えておく。

(4)「場に敏感・敏感でない」:「場依存」という用語(「依存 dependence」という語)が英語文化で持つ否定的なニュアンスを避けるために「場の敏感性 field sensitivity」という語が提唱された(Ramírez & Castañeda 1974)。Ehrman(1996, 1997)は「場依存」という概念を 2 つの部分に分けることにした。1)「場独立」と「場独立でない」状態(上記で説明した), 2)「場の敏感性」と「場に敏感でない」スタイルのふたつである。「場独立」スタイルの学習者は全体の中のある部分に焦点を当てるが, 「場に敏感」な学習者は社会的／人間関係や背景的な事象も含めた学習環境全体を意識していて, まわりにあるものから, 言語で言えば聞いたり読んだりするものから多くを吸収する。従って, 「場に敏感」な学習者は言語環境全体を理解と学習に活用する。「場に敏感でない」学習者は言語環境よりも学習している言語項目に焦点を当てる, ということになる。教室という場所は, 環境から得る情報の乏しいところになりがちである。このことは「場に敏感」な学習者には問題であり, そういう学習者は教員同士やクラスメートが話しているところや, テープやビデオで目標言語の母語話者が話しているのを聞いたり, ポスターなどにも目を向けつつ色々な情報を得ようとすることで, このスタイルの良さを活用することが大切である。「場に敏感でない」学習者は, コミュニケーション中心の教室よりも, 個別の文法法則や語彙の記憶に力点をおく教室でのほうが, やりやすいかもしれない。コミュニケーション中心の教室で困難を感じたら, 先生やクラスメートに必要なストラテジーを開発できるように支援を求めるとよい。例えば, 生の教材やタスクに含まれている豊富な情報を活用するためのストラテジー開発である。

これは, 第二言語習得研究における個人差の先行研究の知見から, 教育に利用可能な部分を抽出したものであり, 「学習スタイル」のうち「認知スタイル」から「ストラ

テジー」の指導への移行が, 無理なく行われていると評価できよう。次節では, 「学習ストラテジー」について概観しておきたい。

5. 学習スタイルと学習ストラテジー

第二言語教育において, 1970 年代から学習ストラテジーに関する議論は始まっている(Selinker 1972, Rubin 1975)が, 優れた学習者がどのような学習ストラテジーを使っているのかを探り, その特徴の分析から他の学習者の学習効率を上げたり, 学習を成功に導いたりする教育現場に活用しようとする考えとなって発展してきた。特に 90 年代初頭に相次いで出版された O'Malley & Chamot (1990) , Oxford (1990) , Wenden (1991) の３冊の文献によって, 「学習ストラテジー」という概念が第二言語の研究教育の分野で確固たる地位を占めることとなった。教師からの情報を受け取るだけの学習者像でなく, 学習に主体的にかかわる学習者という捉え方が背景にある。これは, 言語教育において学習者に注目し, 学習スタイルなどの個人差に着目する中で, 育まれてきたことである。また, 学習ストラテジー研究は, 学習者のスタイルや文化的背景, またどんな能力や技術が必要とされているのかといったことをも考慮に入れなくてはならない(Larsen-Freemen 1991, 伴 1999, 浜田 1999 他)。

学習ストラテジーは取り組むべきタスク／解決すべき問題／場面／条件によって異なるもので, 効果的に使えるように学習したり指導を受けて大きく変化することが, 学習スタイルとは異なる点である。学習ストラテジーは, 語彙の学習をする際に書いて覚えるようにすることなど, 与えられた場面や課題に対してどう取り組むかというやり方で, 原則的に意識的または意識することが可能である。そして, 学習ストラテジーは指導可能だと考えられている。その学習ストラテジーの選択は, とりわけ学習スタイルによって決まってくると言われている(Schmeck 1988; Oxford 1990)。スタイルとストラテジーの関係は鶏と卵のようにも思われるが, 前節の Leaver et al.(2005)の応用例のみでなく, さらに明確にされる必要があるだろう。

学習者の個人差を把握すること, または教師にその知識があることで, 教室内活動で要求している課題に必要な学習ストラテジーを, 学習者に必要に応じて指導することにより, 理屈の上では効率的な学習が進むはずである。すでに Garlinger & Frank(1986)では, 教師と学習者の相性に着目した研究がなされているが, 相性だけでなく, 教師が学習者のストラテジーを把握することによる指導方法の改良から, これをさらに実証研究で検証して行くことも今後の課題となろう。90 年代以降は, 学習ストラテジー研究も盛んになり, その教育現場への応用が「自律的学習者の育成」という視点とも呼応して, 注目されている(Wenden 1991; Benson, 1997, 2001; Esch, 1997; Aston, 1997; Aoki & Smith, 1991 他)。日本語教育でも「学習ストラテジー」に関する研究は注目を浴び

ている(伴　1992；村野　1996；宮崎・ネウストプニー　1999；伊東　1999；臼杵 2002 他)。「学習ストラテジー」に関しては, 前述したように「学習スタイル」研究をも含めた方向で, 具体的な課題や状況との関連を考慮した研究がなされることを期待したい。

6.　動機研究の動向

個人差の様々な要因の中で特に研究蓄積が多いのが, 年齢と動機に関するものである。近年めざましい進展を遂げている動機研究の動向ならびに, 臨界期仮説 CPH の再考が最近なされている年齢要因に関する研究動向をまとめて展望する必要があるが, 本稿では動機研究の概略のみ提示して稿を改めることとしたい。

学習者の動機については, 今では古典的とも言える Gardner & Lambert (1959, 1972) の動機の分類, すなわち「道具的動機」「統合的動機」の二種類の枠組みが長い間影響力を持っていた。しかし動機研究は, 90 年代から変化を遂げ, 認知心理学に基づく「内発的動機」「外発的動機」への感心が高まることになる。その後 90 年代末から活躍している Dörnyei の, ダイナミックにつまり動的に「動機」を捉えようとする研究が注目されている(Dörnyei, 1990, 1994 他)。一連の研究は, 教育的視点を前面に押し出し, 学習効果を高めることに着目しており, Oxford & Shearin(1994), Dörnyei(1994)においても「動機づけの定義や中身を分析する時代から, 実際の授業の場でどのように生かせるかに焦点を移す時代が来た」と述べられている(JACET SLA 研究会 2005；80)。日本語教育においても, 学習者の動機をテーマとした調査は最近の数年間に限っても, いくつも行われており(倉八 1998；文野 1999；三矢 1999；郭・大北 2001；真嶋 2002；守谷 2004 他), 動機を記述するものだけでなく学習活動との関連や, 動機をダイナミックに捉える方向(Dörnyei, 2003)を目指すことがこれまで以上に期待される。

7.　今後の課題

第二言語習得に関する研究には, 習得のメカニズムそのものを解明しようとする立場と, どうすれば習得に成功する人が増えたり, 効率よく習得できたりするのかという教育の立場と, 大きく二つの立場があり, それらは峻別されるべきだという主張がある(白畑他　2004：90)。本稿で扱った学習者の個人差についての研究には, それら二つの立場が研究者の中で明確に区別されていないものも見受けられるが, 多くの研究が「第二言語習得研究」を踏まえた上で, 「第二言語教育研究」(外国語教育学)の範疇で教育的応用を目指すという視点を見失っていないことを, 心強く感じている。それは, 学習者の個人差を研究する動機や目的が, 言語教育現場に端を発していることが多

いからであろう。近年は Leaver et al.(2005)のように明確に教育の立場を打ち出しているものもあるが, 日本語教育の分野での今後の「個人差」や「学習スタイル」の研究に際しては, どちらの立場の研究もまだ必要だと考える。

言語学習における学習者の「個人差」という複雑な事象は, 絡まった糸のように多くの要素が影響し合っている。本稿ではその中のほんの数本の糸をたぐり寄せただけであるが, それによってたぐり寄せた糸に光が当たると共に, 今後は残った糸にも目がいくようになれば良いと思っている。

注

1. 「学習者スタイル」と区別せずに使用する研究者もいることが指摘されている(Grotjahn 2003)。そのため「内向性／外向性」といった個人の性格属性も含められて，その分類が多岐にわたることも多い。Grotjahn は「認知スタイル」を含む上位概念として「学習スタイル」を使っているが，一般にはあいまいな使用もされている。

参考文献

板井美佐(2002)「香港における中国人学習者の学習スタイルに関する調査(The Language Learning Styles of Chinese Learners in Hong Kong)」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』17 筑波大学　留学生センター 61-79.

伊東祐郎(1994)「日本語指導法　−個性と学習ストラテジーからの一考察」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』20 号　95-111.

伊東祐郎(1999)「学習スタイルと学習ストラテジー」宮崎里司　ネウストプニー共編『日本語教育と日本語学習　−学習ストラテジー論にむけて−』くろしお出版　133-145.

植田麻実(2000)「学習者要因」JACET SLA 研究会編著『SLA 研究と外国語教育　−文献紹介−』リーベル出版 45-53.

江原有輝子(1998)「日本人日本語教師とメキシコ人学習者の学習スタイルの違い」『日本語教育』96 号 13-24.

臼杵美由紀(2002)「学習者ビリーフに関するインタビューをもとに―学習ストラテジーと学習者・教師の役割―」『JALT 日本語教育論集』06　全国語学教育学会　日本語教育研究部会 9-18.

SLA 研究会編(1994)『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店

海保博之(2001)「日本語教育と認知研究」『日本語教育』108 号 1-4.

郭俊海・大北葉子(2001)「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機付けについて」『日本語教育』110 号 130-139.

倉八順子(1992)「日本語学習者の動機に関する調査−動機と文化的背景の関連−」『日本語教育』77 号 129-141.

倉八順子(1994)「プロジェクトワークが学習成果に及ぼす効果と学習者の適性との関連」『日本語教育』83 号 136-147.

サミミー小宮桂子(2003)「学習者の個人差：学習者の情緒的要因と日本語教育」畑佐由紀子編『第二言

語習得研究への招待』くろしお出版　101-112.
JACET SLA 研究会編著(2000)『SLA 研究と外国語教育　−文献紹介−』リーベル出版
JACET SLA 研究会編著(2005)『文献からみる第二言語習得研究』開拓社
白井恭弘(2004)『外国語学習に成功する人, しない人　−第二言語習得論への招待−』岩波書店
白畑知彦編著, 若林茂則・須田孝司著(2004)『英語習得の「常識」「非常識」　−第二言語習得研究からの検証−』大修館書店
多喜賢一郎・稲葉竹俊・松永信介　(2005)「認知スタイル理論に基づいた e ラーニング教材のデザインと学習効果」『コンピュータ＆エデュケーション』18 号　106-111.
竹内理(2003)『よりより外国語学習法を求めて』 松柏社
辰野千寿 (1997)『学習方略の心理学―賢い学習者の育て方』 図書文化
谷口すみ子(1990)「初級日本語学習者の学習スタイルの調査」『日本語教育』71 号　197−209.
伴紀子(1992)「言語学習のための学習ストラテジー」カッケンブッシュ寛子他編『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会 213-223.
文野峯子(1999)「学習過程における動機づけの縦断研究―インタビュー資料の複眼的解釈から明らかになるもの―」『人間と環境―人間環境学研究科研究報告』3, 岡崎学園国際短期大学人間環境学研究所, 35-45.
真嶋潤子(2002) 「ドイツの大学における日本語学習の動機　−初級学習者の意識調査」『平成 13 年度教育研究学内特別経費プロジェクト「異文化共存時代の外国語教育・学習(３)」研究成果報告書』大阪外国語大学　63-78.
三矢真由美(1999)「能動的な教室活動は学習動機を高めるか」『日本語教育』103 号 1-10.
水野光晴(1995)『外国語習得　−その学び方 100 の質問−』研究社
宮崎里司　ネウストプニー共編(1999)『日本語教育と日本語学習　−学習ストラテジー論にむけて−』くろしお出版
村野良子(1996)「高校留学生の自律的学習と学習ストラテジー−日本語学習の支援のために−」『日本語教育』91 号 120-131.
守谷智美(2004)「日本語学習の動機づけに関する探索的研究―学習成果の原因帰属を手がかりとして」『日本語教育』120 号　73-82.
守谷智美(2005)「研修生の日本語学習動機とその生起要因―ある中国人研修生グループの事例から―」『日本語教育』125 号　106-115.
Abraham, R. G. (1985) Field independence-dependence and the teaching of grammar. TESOL Quarterly, 19, 689-702.
d'Anglejan, A and C. Renaud (1985) Learner characteristics and second language acquisition: A multivariate study of adult immigrants and some thoughts on methodology. Language Learning, 35, 1-19.
Aoki, N. (1999) The role of affect in the development of learner autonomy. In J. Arnold (ed.), Affect in language learning (pp. 142-154). Cambridge: Cambridge University Press.
Aoki, N. and R. Smith (1999) Learner Autonomy in cultural context: The case of Japan. In S. Cotterall & D. Crabbe (eds.), Learner autonomy in language learning: Defining the field and effecting change (pp.19-27). Frankfurt am Main, Germany: Peter Lang.
Aston, G. (1997) Involving learners in developing learning methods: exploiting text corpora in self-access. In Benson, P. & P. Voller (Eds.) Autonomy & Independence in Language Learning. Essex: Longman. 204-214.
Bausch, K.-R., H. Christ, H.-J. Krumm (Eds.) (2003) Handbuch Fremdsprachenunterricht. 4 Auflage. Tübingen: A.

Francke.
Benson, P. (1997) The philosophy and politics of learner autonomy. In Benson, P. & P. Voller (Eds.) Autonomy & Independence in Language Learning. Essex: Longman. 18-34.
Benson, P. (2001) Teaching and researching autonomy in language learning. Essex : Pearson Education.
Benson, P. & P. Voller (Eds.) Autonomy & Independence in Language Learning. Essex: Longman.
Bialystok, E. and M. Fröhlich (1978) Variables of classroom achievement in second language learning. Modern Language Journal, 32, 327-336.
Breen, M. P. (Ed.) (2001) Learner Contributions to Language Learning: New directions in research. London: Longman.
Brown, H. D. (2001) Teaching by Principles: An interactive approach to language pedagogy, Second Edition. New York: Longman.
Carter, E. F. (1988) The relationship of field dependent/independent cognitive style to Spanish language achievement and proficiency: A preliminary report. Modern Language Journal, 72, 21-30.
Celce-Murcia, M. (Ed.) (2001) Teaching English as a Second or Foreign Language, Third Edition. Boston: Heinle & Heinle.
Chamot, A. U. (2001) The role of learning strategies in second language acquisition. In Breen, M.P. (Ed.) Learner Contributions to Language Learning: New directions in research. London: Longman. pp.25-43.
Chapelle, C. (1988) Field independence: A source of language test variance? Language Testing, 5, 62-82.
Chapelle, C. (1992) Disembedding 'disembedded figures in the landscape': An appraisal of Griffiths and Sheen's 'Reappraisal of L2 research on field dependence/independence,'" Applied Linguistics, 13, 376-384.
Chapelle, C. and P. Green (1992). Field independence/ dependence in second-language acquisition research. Language Learning, 42: 1, 47-83.
Chapelle, C. and C. Roberts (1986) Field independence and ambiguity of tolerance as predictors of proficiency in English as a second language. Language Learning, 36, 27-45.
Cronbach, L. J. and L. Furby (1970) How we should measure "change" or should we? Psychological Bulletin, 74, 68-80.
Crookes, G., and R. W. Schmidt (1991) Motivation: Reopening the research agenda. Language Learning, 41, 469-512.
Davis, J. K. (1991) Educational implications of field dependence-independence. In S. Wapner & J. Demick (Eds.), Field dependence-independence: Cognitive style across the life span (pp. 149-175). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.
Demick, J. (1991) Organismic factors in field dependence-independence: Gender, personality, psychopathology. In S. Wapner & J. Demick (Eds.) Field dependence-independence: Cognitive style across the life span. (pp.209-243). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates,Publishers.
Dörnyei, Z. (1990) Conceptualization in foreign-language learning. Language Learning, 40, 45-78.
Dörnyei, Z. (1994) Motivation and motivating in the foreign language classroom. The Modern Language Journal, 78, 273-284.
Dörnyei, Z. (2001a) Teaching and Researching Motivation. Harlow, UK: Pearson Education.
Dörnyei, Z. (2001b) Motivational strategies: Creating and maintaining student motivation in the foreign language classroom. New York: Cambridge University Press.
Dörnyei, Z. (2001c) "New Themes and Approaches in Second Language Motivation Research" Annual Review of Applied Linguistics 21. 43-59.

Dörnyei, Z. (2003) “Individual Differences in Second Language Learning.” In Doughty & Long (Eds.) (2003), pp.589-630.

Dörnyei, Z, and Csizer., K. (2002) "Some Dynamics of Language Attitudes and Motivation: Results of a Longitudinal Nationwide Survey". Applied Linguistics 23/4: 421-462. OUP.

Dörnyei, Z. and Schmidt, R. (Eds.) (2001) Motivation and Second Language Acquisition. University of Hawaii.

Dörnyei, Z. and Skehan, P. (2003) Individual Differences in Second Language Acquisition. In Doughty, K. and Long, M. H. The Handbook of Second Language Acquisition. 589-630.

Doughty, K. and Long, M. H. (2003) The Handbook of Second Language Acquisition. Oxford: Blackwell Publishing Ltd.

Ehrman, M. E. (1996a) Understanding second language learning difficulties: looking beneath the surface. Thousand Oaks, CA: Sage.

Ehrman, M. E. (1996b) An exploration of adult language learner motivation, self-efficacy, and anxiety. In R. Oxford (ed.), Language learning motivation: Pathways to the new century, University of Hawai’i, Second Language Teaching & Curriculum Center, 81-103.

Ehrman, M. E. (1997) Field independence, field dependence, and field sensitivity. In J. Reid (ed.), Understanding learning styles in the second language classroom (pp.62-70). Englewood cliffs, NJ: Regents Prentice Hall.

Ehrman, M. E. (1998) A study of the modern language aptitude test for predicting learning success and advising students. Applied Language Learning 9 (1 and 2): 31-70.

Ehrman, M. E. (2002) Understanding the learner at the superior-distinguished threshold. In B. L. Leaver and B. Shekhtman (eds.), Developing professional-level language proficiency . Cambridge: Cambridge University Press. pp.245-259.

Ehrman, M. E. and Z. Dörnyei (1998) Interpersonal dynamics in second language education: the visible and invisible classroom. Thousand Oaks, CA: Sage

Ehrman, M. E. and B. L. Leaver (2003) Cognitive styles in the service of language learning. System 31, 393-415.

Ehrman, M. E. and R. Oxford (1990) Adult language learning styles and strategies in an intensive training setting. The Modern Language Journal, 74, 311-327.

Ellis, R. (1994) The Study of Second Language Acquisition. Oxford: Oxford University Press.

Ellis, R. (1997) Second Language Acquisition. Oxford: Oxford University Press. [ロッド・エリス　牧野高吉訳 (2003)『第２言語習得のメカニズム』ちくま学芸文庫]

Esch, E. M. (1997) Learner training for autonomous language learning. In Benson, P. & P. Voller (Eds.) Autonomy & Independence in Language Learning. Essex: Longman. 164-176.

Gardner, R. and W. Lambert (1972) Attitudes and Motivation in Second-Language Learning. Rowley, MA: Newbury House.

Gardner, R. (1985) Social Psychology and Second Language Learning: The role of attitudes and motivation. London: Edward Arnold.

Garlinger, D. K. & B. M. Frank (1986). Teacher-student cognitive style and academic achievement: A review and mini-meta-analysis. Journal of Classroom Interaction, 21 (2), 2-8.

Gass, S. M. and L.Selinker (2001) Second Language Acquisition: an introductory course. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.

Griffiths, R. and R. Sheen (1992) Disembedded figures in the landscape: A reappraisal of L2 research on field dependence/independence, Applied Linguistics, 13, 133-148.

Grotjahn, R. (2003) Lernstile/Lernertypen. In Bausch, K.-R., Christ, H. & Krumm, H.-J. (Eds.) Handbuch Fremdsprachenunterricht, 4. Auflage. Tübingen: A. Francke Verlag Tübingen und Basel. 326-331.

Hansen, L. (1984) Field dependence-independence and language testing: Evidence from six Pacific island cultures. TESOL Quarterly, 18, 311-324.

Horwits, E. K. and D. J. Young (1991) Language Anxiety: from theory and research to classroom implications. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.

Horwitz, E. K., E. B. Horwitz and J. Cope (1986) Foreign language classroom anxiety. The Modern Language Journal, 70, 125-132.

Jamieson, J. (1992) The cognitive styles of reflection/impulsivity and field independence/dependence and ESL success. Modern Language Journal, 76: 491-501.

Johnson, K. and H. Johnson (1998) Encyclopedic Dictionary of Applied Linguistics. Oxford: Blackwell Publishers. ［ジョンソン・ジョンソン編　岡秀夫監訳　窪田三喜夫ほか訳　1999『外国語教育学大辞典』大修館書店］

Larsen-Freeman,D.,and M. L. Long (1991) An introduction to second language research. New York: Longman.

Larsen-Freeman, D. and M. Long (1991) Explanation for differential success among second language learners. In An Introduction in Second Language Acquisition Research. New York: Longman. 153-219.

Larsen-Freeman, D. (2001) Individual cognitive/affective learner contributions and differential success in second language acquisition. In Breen, M.P. (Ed.) Learner Contributions to Language Learning: New directions in research. London: Longman. 12-24.

Leaver, B. L., E. Ehrman and B. Shechtman (2005) Achieving Success in Second Language Acquisition. Cambridge University Press.

Lightbown, P. M. and Spada, N. (1999) How Languages are Learned, Revised Edition. Oxford: Oxford University Press.

Little, D. (1991) Learner autonomy: Definitions, issues and problems. Dublin Ireland: Authentik.

Littlewood, L. (1999) Defining and developing autonomy in East Asian contexts. Applied Linguistics, 20, 71-94.

Long, M. H. and Doughty, C. J. (2003) SLA and Cognitive Science. In Long and Doughty, The Handbook of Second language Acquisition. 867-870.

Macaro, E. (2003) Teaching and Learning a Second language: A guide to recent research and its applications. London: Continuum.

Majima, J. (1994) A Study of Field Independence and Achievement among American College Students Learning Japanese. Doctoral Dissertation, The University of Georgia, Athens. [真嶋潤子(1998)『Learner Difference and Japanese Language Education: A Study of Field Dependence/Independence Cognitive Styles and Japanese Language Learning. 学習者の個人差と日本語教育　−「場依存・場独立」認知スタイルと日本語学習の一研究−』大阪外国語大学学術研究双書 18.]

McKenna, F. P. (1984) Measures of field dependence: Cognitive style or cognitive ability. Journal of Personality and Social Psychology, 47, 593-603.

McDonough, S. (1995) Strategy and Skill in Learning a Foreign Language. Edward Arnold.

McDonough, S. H. (1999) Learner Strategies. Language Teaching, 32, 1-18

Messick, S. (1984) The nature of cognitive styles: problems and promise in educational practice. Educational Psychologist 59, 59-74.

Missler, R. A. (1986) Analytic and synthetic cognitive functioning: A critical review of evidence bearing on field

dependence. Journal of Research in Personality, 20, 1-33.

Naiman, N., Fröhlich, M., & Stern, H. H. & Todesco, A. (1978) The Good Language Learner. Toronto, Canada: Ontario Institute for Studies in Education.

Nakagawa, Kazuko. (1990) How does cognitive style difference affect L2 learning? Paper presented at the annual conference of Nihongo Kyoiku Gakkai [日本語教育学会大会報告], Tokyo, Japan

Nunan, D. (1999) Second Language Teaching & Learning. Boston: Heinle & Heinle.

O'Malley M. and Chamot, A. U. (1990) Learning Strategies in Second Language Acquisition. Cambridge: Cambridge University Press.

Oxford, R. L. (1989) Strategy Inventory for Language Learning Acquisition. Cambridge: Cambridge University Press.

Oxford, R. L.(1990) Language Learning Strategies: What every teacher should know. New York: Harper Collins.

Oxford, R. L. (2002) Sources of Variation in Language Learning. In R. B. Kaplan (Ed.) The Oxford Handbook of Applied Linguistics, Oxford University Press, pp.245-252.

Oxford, R. (2001) Language Learning Styles and Strategies. In Celce-Murcia, M. (Ed.) Teaching English as a Second or Foreign Language, Third Edition. Boston: Heinle & Heinle, pp.359-366.

Oxford, R. L. and N. J. Anderson (1995) A Crosscultural view of learning styles, Language Teaching, 28, 201-215.

Oxford, R. and J. Shearin (1994) Language learning motivation: Expanding the theoretical framework. The Modern Language Journal, 78, 12-28.

Reid, J. (Ed.) (1995) Learning Styles in the ESL/EFL Classroom. Boston: Heinle and Heinle.

Riding, R. and S. Rayner (1998) Cognitive Styles and Learning Strategies: Understanding style differences in learning and behaviour. David Fulton Publishers Ltd.

Roberts, C. (1984) Field independence as a predictor of second language learning for adult ESL learners in the United States. (Doctoral dissertation, University of Illinois, 1983). Dissertation Abstracts International, 45, 1385A.

Robin, J. and I. Thompson (1994) How to be a More Successful Language Learner. Boston: Heinle and Heinle.

Robinson, P. (Ed.) (2002) Individual Differences and Instructed Language Learning. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Rubin, J. (1975) What the 'good language learner' can teach us. TESOL Quarterly 9, 41-51.

Rubin, J. and I. Thompson (1982) How to be a More Successful Language Learner. Boston: MA: Heinle & Heinle.

Samimy, K. and M.Tabuse (1992) Affective variables and a less commonly taught language: A study in beginning Japanese classes. Language Learning, 42, 377-398.

Scarcella, R.C. and R.L. Oxford (1992) The Tapestry of Language Learning: The individual in the Communicative Classroom. Boston: Heinle and Heinle. [スカーセラ, オックスフォード著　牧野高吉訳・監修／菅原永一ほか訳(1997)『第２言語習得の理論と実践–タペストリー・アプローチ–』松柏社]

Scharle, A., & A. Szabo (2000) Learner Autonomy: A guide to developing learner responsibility. Cambridge: Cambridge University Press.

Schmeck, R. R. (Ed.) (1988) Learning Strategies and Learning Styles. New York: Plenum Press.

Schumann, J. H. (1975) Affective factors and the problems of age in second language acquisition. Language Learning, 25, 209-235.

Selinker, L. (1972) Interlanguage. International Review of Applied Linguistics, 10, 3, 209-31.

Sheen, R. (1993) A rebuttal to Chapelle's response to Griffiths and Sheen, Applied Linguisitcs, 14, 98-100.

Silver, H. F. and J. Robert Hanson (1996) Learning Styles and Strategies. Ho-ho-kus, NJ: Silver, Strong, and Associates.

Singleton, D. and L.Ryan (2004) Language Acquisition: The age factor, 2nd Edition. Clevedon, UK: Multilingual Matters.

Skehan, P. (1989) Individual Differences in Second Language Learning. London: Edward Arnold.

Sperry, L. (1972) Learning Performances and Individual Differences. Glenview, IL: Scott, Foresman.

Spolsky, B. (1989) Conditions for Second Language Learning. Oxford: Oxford University Press.

Stansfield, C. & J. Hansen (1981). The relationship of field dependent-independent cognitive styles to foreign language achievement. Language Learning, 31, 349-367.

Stansfield, C. & J. Hansen (1983) Field dependence-independence as a variable in second language cloze test performance. TESOL Quarterly, 17, 29-38.

Stern, H. H. (1975) What can we learn from the good language learner? Canadian Modern Language Review, 31, 304-318.

Takahashi, S. (2005) Pragmalinguistic Awareness: Is it Related to Motivation and Proficiency? Applied Linguistics 26/1, 90-120. Oxford University Press.

Ushioda, E. (2001) Language learning at university: Exploring the role of motivational thinking. In Z. Dörnyei and R. Schmidt (Eds.), Motivation and Second Language Acquisition (Tech. Rep. No.23, pp. 93-125). Honolulu: University of Hawai'i, Second Language Teaching and Curriculum Center.

Wakabayashi, S. (2003) Contributions of the study of Japanese as an L2 to our general understanding of SLA and the definition of SLA research. Second Language Research 19, 76-94.

Wapner, S. and J. Demick (Eds.) (1991) Field dependence-independence: Cognitive style across the life span. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates,Publishers.

Wenden, A. and J. Rubin (Eds.) (1987) Learner Strategies in Language Learning. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

Wenden, A. (1998) Metacognitive knowledge and language learning. Applied Linguistics, 19, 515-537

Wenden, A. (1991) Learner Strategies for Learner Autonomy. Prentice-Hall.

Wenden, A. L. (2002) Learner Development in Language Learning, Applied Linguistics 23/1: 32-55. OUP.

Willing, K. (1989) Teaching How to Learn: Learning Strategies in ESL: A Teachers Guide. Macquarie University.

Witkin, H. A. and D. R. Goodenough (1981) Cognitive Styles: essence and origins: Field dependence and field independence. NY: International Universities.

Witkin, H. A., C. A. Moore, , D. R. Goodenough and P. W. Cox (1977) Field-dependent and field-independent cognitive styles and their educational implications, Review of Educational Research 47, 1-64.

Witkin, H., P. Oltman, E. Raskin and S. Karp (1971) A Manual for the Embedded Figures Tests. Palo Alto, CA: Consulting Psychologists.

Young, D. J. (1991) Creating a low-anxiety classroom environment: What does the language anxiety research suggest? The Modern Language Journal, 75, 425-439.

Young, D. J. (Ed.) (1999) Affect in Foreign Language and Second Language Learning: A Practical Guide to Creating a Low-Anxiety Classroom Atmosphere. McGrow-Hill.

Individual Differences and Second Language Acquisition: Focusing on Learning Styles

Junko Majima (Osaka University of Foreign Studies)

Abstract

This article reviews and discusses the subject of "learning style" among the various factors that concern "individual differences" in second language learning. First, the author shows that there is not yet consensus regarding what factors to include under the rubric of "individual differences" and that studies on "individual differences" are scarce in the field of teaching Japanese as a second language. She then reviews research developments in cognitive style that deal with the opposing styles of field independence (FI) and field dependence (FD). The author then outlines the two major problems in designing any study of FI/D cognitive styles and their relation to L2 acquisition, which arise in phases: 1st the formulation of a valid construct and 2nd its measurement. Next, some developments in recent literature are introduced and their applications to educational situations explained (Leaver et al. 2005). Finally, studies on "learning styles" in relation to "learning strategies" are called for.

Keywords: individual differences, learning styles, Field Independence/Dependence Cognitive Style, learning strategies,

原稿受付：2005.11.8
掲載決定：2005.11.11